

#### **4. 教員にありがちな意識**

「交渉・要望」は大切なのかも知れないという思いをもった方もいると思います。しかしながら、私たち教員には次のような意識はないでしょうか。

##### **(1) 身分が保障されているのだから、勤務条件について言うのは申し訳ない。**

ならば、何をされてもよいかと言うことです。多忙を極めるばかりの職場になり、疲弊感が漂うばかりです。「死者が出なければ変わらない。」「過激な言動で注目されないと変わらない。」状況を生み出しかねません。

##### **(2) 教員である以上、子供のことが第一であり、組合活動によって子供たちを犠牲にするのはいかがなものか。**

まさしくその通りです。岐学組は教員を「教育専門職」と位置付けています。まず、子供たちのためになるか、子供たちのためならば頑張れるという視点で考えます。その上で、子供たちと毎日生活する私たちが元気でなければ、子供たちも元気にはなれないという考えのもと、私たちが元気で安心して職務に励めるようにしていく必要があると思うのです。教員のためになることは、結果的に子どものためになり、逆もまた然りです。

##### **(3) 何を言っても変わらないだろう。**

学級で、子供たちが先生に対してこのように考えたら、子供たちは無気力になるか、担任の言うことに耳を傾けなくなります。学級が過ごしやすく感じるのは担任だけで、裏では集団が崩壊を始め、児童生徒の個が真っ当に育ちません。大人と子どもの世界は違うかもしれませんが、私たちでも教員集団に活力がなくなったり、仕事がしにくくなったりするのではないのでしょうか。